

サトリの  
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗妙善寺住職  
的場徳雅さん

第79回

私は東京・六本木の街中にある妙善寺に生まれ育ちました。一人っ子ですが、寺にはお坊さんになるために立正大学に通いながら住み込みでお勤めする地方出身の方たちがいて、年の離れたお兄さんがたくさんいるような環境でした。中学生のころからお笑いが好きになり、「将来はお笑い芸人になりたい」という夢を抱くように。高校では演劇部、大学では落語研究会に所属し、好きなことに没頭しました。「いつかはお坊さんに……」とは思いますが、住職である父が元氣なうちは自分の好き

なことをしたい  
という甘い考え  
があったのです。

2004年に  
35日間の修行道  
場（日蓮宗のお  
坊さんになるた  
めの修行）を修  
了し、100日間の大修行（世界

三大荒行のひとつに数えられる日蓮宗の厳しい修行）も成満しました。つらく厳しい修行で心身ともに追い込まれましたが、そんな過酷な状況だったからこそ「やっばりお笑いが好きだ」と実感。その夢をあきらめきれず、吉本興業の養成所「NSC」に入りました。

### 「お笑い芸人になる」という夢を抱いてNSCへ

NSCでお笑い漬けの日々を過ごし、週末はお寺のお手伝いという二重生活。でも、お笑いの世界は想像以上に厳しいものでした。おもしろくなかったら、それで終わり。私はトリオを組んでライブ活動などを行なっていました。3年ほど続けてもなかなか芽が生まれませんでした。

そんなとき父が大病を患い、私はお寺へ戻ることになりました。お笑いの道は断念しましたが、「お坊さんをやんならとこんやってみよう」と心新たに、人材養成機関である日蓮宗布教研修所に入り、半年間勉強しました。その後は3年間、身延山久遠寺でお勤めをし、東京



上／妙善寺は徳川家康の側室、お萬の方ゆかりの寺。右下／上映するお金や機会がない人のために「妙善寺映画祭」を開催。左下／ノルウェーのジャズミュージシャンとの交流も。

### お寺を開放することで多くの交流が生まれる場に

あるとき不思議な縁をいただき、被災地などの写真を撮っているカメラマンの方と知り合いました。「このお寺で写真展をやりたい」と希望され、試しにやってみることに。入場無料で1週間、開催しました。そこで私は気づいたのです。「日本には無料で芸術活動ができる場がない」と。何かを発信したい人にお寺を開放したい……もし私がお笑いをやっていなかったら、そんな考えには思い至らなかったかもしれません。それ以来、お寺で写真展やコンサート、映画祭などを開催したり、自分自身も老人ホームや被災地で落語をさせていただいています。

今思うと、お坊さんになったのに好きなことができています。お笑い芸人になるという夢は叶わなかったけれど、誰かを楽しい気持ちにさせたいという願いは今、叶っているような気がします。遠回りに思えて、実はこれが近道だったのだと身にしみて感じています。

何かをあきらめたからこそ  
叶う夢もあるのです

まとはとくが 1981年生まれ、東京都出身。立正大学仏教学部卒業後、NSC（吉本総合芸能学院）入学。お笑い活動などを経て、2013年より妙善寺住職に。被災地で落語をしたり、お寺の一部を無料開放して写真展やライブ、映画祭などを行なっている。妙善寺では現在、イベントをお手伝いしてくれるボランティアスタッフを募集中。<http://www.myozenji.or.jp>